

を用ふる計算し得る量を取扱ふ正確なる科學は物理學であるといふ事が出来る。尙この外に、理論の論理學的必然性に基く科學の場合もあり、或は又ある學問の場合に於ては、最後の一步に於て精密嚴正とは異なる何かの要素に基かなくては、その學問が、それに個有な學問らしい學問性を却つて發揮出来ない場合もある。

論證的學問性の限界を、氏は透察性三名付けてゐるが、かくすれば學問は論證的三透察性の二者に分たれる。而して氏は更にこの兩者に夫々對應して眞理を分つて、(1)事實決定の眞理(水素原子の構造等)三、(2)事實解釋の眞理(藝術作品の鑑賞等)三してゐる。この透察的學問性とは、論證的學問性とは異り、性格的乃至個性的である。然らば透察性は超個人的普遍性をもたないか。個人は歴史社會に於ける存在である。個人は時代的錯誤三地方的錯誤三からさへ警戒されねばならぬ。こゝに透察は或る普遍性を要求される。この錯誤を除く方法三として透察は二個の條件を具備せねばならぬ。(一)多面性、包括的なること。(二)透察の正面的なること。かくして氏によれば論證的學問性の代表的なるもの三として、自然科学特に物理學があり、透察的學問性の代表的なるもの三として歴史科學が生ずる。而して他の科學はこの兩者の中

間に位するもの三氏は主張してゐる。

上述せる所は、本書に於て取扱へる問題三、その解決三を、演繹的に叙述せるものである。氏はその意味する所を誤解ならしむる爲であらうが、その文章に於て可なり廻りくまなく言ひ廻してゐられる點も見受けられたが、從來の哲學書に於てよく見られた生硬な字句を成る可く使はないで、しつこり三した日常語で適切に表現せられた點は、大いに氏の努力の跡が見られた。且その行文に於て、知つてゐる知識を教へる爲に羅列する三といふ氣配が少しもなく、絶えず問題を起してはそれを根本的に思索し、更に次の問題を起す三といふこの論の進め方は、所謂『哲學する』、『思索する』三といふこの練習三としても極めて有意義な試みであると思はれる。この意味に於て苟も哲學に志さるゝ諸氏の是非閱讀すべき良書たるを信ずる。(岩波書店刊行)〔飯田順雄紹介〕

天台の密教 清水谷恭順著

我が國に密教の傳へられたのは、傳教大師以前からであるが、當時は、まだその傳來が正規的でなく、所謂雜密三稱せられる状態であつた。大師は唐に入つて、天台宗を傳へるにあたり、天台宗のものに密教や禪、念佛をも併せ傳へた。故に大師を日本最初の密教の阿闍梨三

稱する所以である。つゞいて弘法大師が密教そのものを傳へたから、弘法大師の傳へた密教を東密と稱するに對し、傳教大師の傳へた密教を台密といふ。

本書は天台宗の清水谷恭順師が台密の歴史と事教の二相とを簡明に提示されたものである。第一編「教史」の篇に於て密教の歴史をまづ印度、支那の二國に互つて叙述し、我が國に於ける台密を詳に説いて、明治に及んである。第二編は「教綱」三題し、教相と事相との主要な論題十五をあげて説いてある。菊版二五二頁の書であるから、全體にわたつて細密な説明を求めがたいけれども、現代文で平易に大綱を掲げ、特に専門語や地名なきには上欄に註解を施してあるから、初學入門の士には便利である。況や現代文正平明に台密を説いた本が稀少なる今日とじて、學益をも少なからず與へるであらうと信ぜられる。(東京帝國大學正門前、山喜房發刊、定價貳圓參拾錢)

大思想家 (カント、フイヒテ、ヘーゲル、シエリング) 大橋勉譯

本譯書はエルンスト・ツォン・アステルの編纂した、「大思想家」(Grosse Denker)の中から、一部分を譯したものである。原書はギリシヤ以來の大哲學者又は學派について諸學者が分擔執筆したものであつて、各篇それ々々

が一つづ、獨立した研究論文であると共に、全部を通じて一部の西洋哲學史となる組織である。執筆者がそれ々々特に深く研究した哲學者又は學派について書いてゐるから、一人で西洋哲學史を書くよりは、確にその部分にも深い研究の成果を提供してゐる。しかも、部分的特殊の研究の論文でない、哲學者又は學派について一般的に、即ち各學者の學說と人格とを包括的に述べてある。即ち一種新しい試みの哲學史として學界に歡迎されるものであるといふことが出来るであらう。本譯書はその中からカント(メンツェル執筆)、フイヒテ(メデクス執筆)、ヘーゲル(ファルケンハイム執筆)、シエリング(ブラウン執筆)の四篇だけを抜萃して譯出したものである。尙原著の他の部分は他の譯者によつて譯出されるさうである。(岩波書店發刊、貳圓參拾錢)